

『東明』

朝鮮洋楽の夢幻的来歴 4

(1922 年 12 月 17 日付)

どんな国であってもその国の芸術は大概、はじめは宮中か貴族階級に支えられ発達するものである。それには相応の理由もある。また、芸術がある特権階級だけの玩弄物になってはならないが、今日に至るまで芸術が宮殿にて発達したことは事実であり、王宮や周囲の貴族の庇護無しには発達できなかったことも否めない。それゆえ、我が国の洋楽史を考えるにあたって全く民衆と関係なく宮廷または貴族社会の手中にて育てられ、彼らの為にこそ存在意義が認められた。勿論、軍楽隊という名義が残っていた頃は、それが一般民衆と接触する機会が少ないのも納得できたが、軍隊が[日本により]解散させられた後にも李王職所管となったのをみると未だ王家の専用物であり、民衆とは何一つ縁がなかった。しかし、王家では無用となり、最後の解散によって朝鮮唯一の我が洋楽隊はやがて民衆の手に渡った。今日は全てにおいて民衆が主人となる時代が到来した。今は朝鮮の洋楽隊が民衆の手に戻ってきたという事実は当然のことだが、それでは、私たち民衆には果たして、この洋楽隊が以前謳歌した盛況を維持する能力と誠意があるのだろうか。今日所謂、京城楽隊①という名義で解散後に再び組織された彼らの現況をみると、我が社会がどれだけ無能で冷淡で無理解であるかがわかるだろう。

本来この国の社会と言えは事実上、多事多端のため至急のことが多く、い

つ暇があつてのんびりと洋楽のごとき遊戯物を考慮すると言われるかもしれないが、多忙で喫緊の重大事業が多く、さらに社会上の態度が革新されるとはいえ、我たちの最終最高の理想が私たちの生活を芸術化することである以上、芸術的施設を一つでも多く増設することが無理であっても、既設のものをなくし捨てることは大きな損失である。新しき社会、繁栄した社会をめざすものとしては黙過できないことである。従つて今日の京城洋楽隊の存廃の岐路にて彷徨し、自尽自滅することになれば、その責任が社会にあることは言うまでもない。せつかく自分たちの手中に戻ってきたものを自ら処理し完成させることのできない我が民衆は、自身の損失を招いたのであり、民衆的経営の第 1 の試練にて失敗した意味を背負い、私たちは無能で無理解であり、ひいては私たちには所謂文化生活に参加する資格すらないことを認めてしまうのと同じである。

それでは、現在の京城洋楽隊の状況はどうだろうか。それは読者諸君も周知のことであろうが、解散以降さらにつまらぬ存在となり[隊員が]離散していったところを白禹鏞氏の苦心尽力のお陰でやっと 20 名以内の人員を集め京城楽隊を組織し、青年会館内の一室を借りて、毎週数回練習をする状況であるという。彼らは喇叭を吹いたり太鼓を叩いたりして食べていくことは出来ない。だからといって副業があり、別の道でどうにかこうにか生活できるわけでもない。本来音楽というのは、一生をそれに捧げても成功が保証できるとは言い難いのに、のんびりと生計のための他の職に就くことは考えられない。これまでの 1、2 年間は白禹鏞氏の一個人の努力に委ね、若干の給料を

支払いながらやっと今日まで維持できたが、今後は雀の涙のような収入だけでは望みがなく、12 月の歳末からは十分でないその給料さえも支給できない状況に陥ったという。

現在の京城楽隊は食のため芸術を捨てるか、芸術のため飢渴を耐えるか、という岐路で一大試練の困難に直面している。しかし、万が一京城楽隊を成り行きに任せると、朝鮮の管楽はその残影さえなくなり、再興の希望もないだろう。これはただ、京城楽隊に対して痛惜の念を表すだけでなく、朝鮮の楽壇に対しても弔意を表すことであり、白禹鏞氏以下の現在京城楽隊員諸君には誠に申し訳ないことである。問題は些細なことのようなだが、その影響と文化生活上の意義を考えると私たちにとっては到底黙過できない一大事である。それでは、これに対する救急策として何があるのか。それは我々が論及しようとすることである。ひとえに、賢明な先輩諸位と社会の有志大家諸君の奮起を切望するのみである。